

となつた。なお旗本杉浦氏は桓武平氏三浦杉本氏族、寛政系図によると蕃士(旗本)に十七家がある。

(七)

十代高輪の四男五女について調査が行届かないが、公女四人はいずれも大名・旗本家に嫁している。長女満子は文化十年(一八一三)の生れ、母は正室井伊氏(勝子)、文政十二年(一八二九)十二月、細川中務少輔行茶に嫁した。この細川氏は肥後熊本五十四万石細川奔護家の支藩、宇土三万石細川立政の長子が中務少輔行茶である。三女菊子は文化十四年(一八一七)正月生れ、母は夫人井伊氏、天保五年(一八三四)旗本荒本利和に嫁した。四女泉子は文政元年(一八一八)十月の生れ、生母は妾佐伊子、天保四年(一八三三)十一月、下野喜連川五千石(大名格)喜連川左馬頭宣氏に嫁した。五女孝賀子は文政二年(一八一九)の生れ、母は夫人井伊氏、天保八年(一八三七)四月、大副肥前守の長男辰之丞に嫁した。喜連川氏は石高は低いが大名称の家柄、足利氏の直系古河公方義氏(齋)喜連川公方國朝の弟、五馬頭頼氏の後で、九代(孫)左兵衛督彰氏の妹嫁子に九代高誠の夫人である。大副氏は武蔵耳堂の流札、大田原資清の子資増が大副晴増の後を継いで、左衛門佐資増と名乗り、関ヶ原の役後下野黒羽一万九千石に封じられた。支庶一家がある。寛政系図によると同氏に肥前守はなく、肥後守が三人ある。

以上はなほだ杜撰な調査であるが、鶴藩歴史・佐伯郷土史などの記述を、多少なりとも補筆できれば幸いである。

(おわり)

東京便り

文化都市佐伯への躍進を 麻生英臣

序 略 その後史談会の文化活動はいかが進展していかすか。造船不況を軸に、佐伯の街がはかばかしくならない様子かしのはれ、大鶴市長になってより、佐伯の行政にどんな手が打たれるか、大いに興味あるところだ。工業立地をはじめとする経済活動を盛んにすることの意味は、最も大切なことであることばかりですが、佐伯という地勢、風土から、今後大中を経済活動の伸びが期待出来ないことか、佐伯市民は何に楽しみを見出し、何を誇りに生きがいを感じることになるのでしよう。

目下日本の行政は中央より地方の時代に移りつつあり、それ以前にその地方に於いて、そこに有る資源を活用して、しかも文化的意義を持つて定住をせよということになり、それがその市町村にある歴史的文化的資源を復活させ、共同体意識を鼓舞し、自立した市民生活をくりひろげようとするもので、全国的なブームにあります。佐伯の行き方こそこの時節極く文化活動問題を研究すべきとみるに未だいてと申せましょう。(中略) 市立図書館・民芸資館・佐伯地方の民話伝説の調査、民話や踊りの記録整理など、実に多くのことが考えられ、市の教育委員会と組むなりして、活動なすって下さい。同封レポート資料は、そのうち大鶴市長にも見せて下さい。そして大分県南部地方の文化活動で、他県・他市からうつらやまれるような市民コミュニティ文化活動もやっています。私も遠く東京に往んでいます。古い歴史及び歴史的資源を内包する佐伯に誇りを持っていきます。そして色々なアイデアを持ってまいります。観光行政手段でもアイデアをもっています。ではそのうちまた。